神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ（8回連載、第8回）

第八章　「神と共に歩む人生」から何が得られるか

この章の主題は、「キリスト者になる価値はあるのだろうか」です。これについて、まず聖書のみことばを見てみましょう。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。（エペソ　1・3）

このみことばは、イエス様がどれほど豊かな祝福をキリスト者に与えてくださるかを明示しています。それは「天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださる」という、まさに驚くべき事実です。その大きな祝福について語る前に、いくつかの前提条件を挙げておきましょう。

前提の第一は、「神と共に歩む人生」は私たちの幻想でも想像でもない、ということです。

都会で牧師をしているといろいろな方に出会います。最近ある青年と話した時、私は言いました。「あなたの人生は、あなたが神に従うようになれば、もっと素晴らしいものになるのに」。彼は答えました。「ブッシュさん、現実的な話をしましょう。人間は大自然の力に対して自分がいかに無力であるかを感じた時、自分を助けてくれる強い力を求めます。ですから昔の人は、人間を超越した力強い神々を勝手に想像したのではないでしょうか。その神々はアラーやエホバやアポロ、また如来だったりするのです。でも、その後現在までに、それらの神々はすべて人間の想像の産物に過ぎず、天国は実は空っぽだった、ということが皆にわかってきたのではないでしょうか」と。

私はこの話を聞いて驚き、彼に尋ねました。「えっ。あなたはイエス様を知らないのですか？」。彼は言いました。「イエス様？そのイエス様も他の多くの宗教と同じように、想像の産物でしょう？」。私は続けて彼に説明しました。「ああ、それはひどい誤解です。イエス様がどういうお方なのかをあなたにお話しましょう。イエス様というお方を知って初めて、神が生きておられることがわかります。私たちは、イエス様を知らずに神を知ることはできません」と。そして、続けてイエス様がどういうお方なのか、彼にはっきりとわかるように伝えていきました。

途中ですが、ここで別の事実を借りて説明したいと思います。私の人生には数限りない困難な場面がありました。信仰を持っているだけで刑務所に何回も入れられました。戦時中、ナチスの支配する第三帝国では、私のような牧師は排斥されて刑務所に入れられたのです。それらはほとんどが劣悪な設備の刑務所でした。壁が薄いので、隣の部屋の人の咳や、上の階の人の立ち居振る舞いがすべて伝わってくるような所でした。

私の独房は非常に狭く、同じような隣の独房に新しい囚人が入ってきました。彼はゲシュタポ（秘密警察）に捕まったのでした。ひどく絶望していて、夜中にはいつも彼の泣き声が聞こえてきました。男が泣くのはとても惨めです。彼はまるで動物のように独房の中を行ったり来たり、いつも歩き回っていました。ため息をついて呻いている声も聞こえてきました。けれども私の独房は、不思議な平安に満ちていました。イエス様が私の部屋におられたからです。しかし、隣の絶望に打ちひしがれた男性のことを思うと、私はどうしても彼に話をしなければと思いました。そこで看守を呼んでこう尋ねてみました。「隣の男性は絶望しきって悲しんでいます。このままでは絶望のために死ぬかも知れません。私は牧師です。彼のところに話に行かせてくれませんか」と。看守は「ちょっと待て。上の人に聞いてくるから」と言って出かけ、ややあって帰ってくると「だめだ。許可が下りなかった。断られてしまっ

た」と言いました。

私は絶望した隣の男性を目で見ることはできませんでした。隣の部屋にいたのに、青年なのか、年配者なのかすらわかりませんでした。ただ、彼の非常な絶望感だけが伝わってきたのです。「あの壁を破って彼のところに行くことができたら」と、どれほど思ったことでしょう。しかし私には壁を打ち破ることなどできませんでした。

その時私が置かれていた状況は、実は、天と地を創造された生ける神が置かれている状況と大変よく似ているのです。

私たちは三次元の制約された空間に囲まれています。実は、神はあなたが手を差し伸べれば届くようなすぐ傍らにおられるのですが、神と私たちの間には大きな見えない壁があるのです。神の耳には、この世界のすべての嘆き、叫び、泣き声が聞こえてきます。つらい目にあっている人々の呪いや恨み、寂しく悲しい心の底の涙、死の淵に立たされている人々の痛みと絶望、そして不当な圧制のもとに苦しんでいる人々の嘆きなど。隣の独房の男性の苦痛が私に伝わって来たように、この地上で悩み苦しんでいる人々の嘆きや悲しみのすべては、神の心にひしひしと伝わっていくのです。まるで神ご自身の痛みのように。

ここで、よく考えてみてください。私たち人間にはできなかったことが、神にはできるのです。その昔、約二千年前のある日、神は人々との間の壁を打ち破りこの世にイエス様を遣わされました。イエス様は神のひとり子でありながら人の姿をとって、この世のありとあらゆる悲しみ、痛み、嘆きの中に入ってきてくださいました。神と人との壁を破ってイエス様がこの世に来られたという事実が厳然とありながら、いまだに神の存在を否定するということは、まさに頑迷と無知以外の何物でもありません。

今こそ私はイエス様についてお話したいと思います。イエス様はベツレヘムで生まれ、成長なさいました。見かけは神の栄光を帯びているようには見えませんでしたが、人々は次第にイエス様に心を惹(ひ)かれていきました。イエス様を通して神の愛と恵みが私たちに提供され、人々はそのことを感じ取ったのです。

イエス様が当時住んでおられたカナンの地は、ローマ帝国の属国の一部でした。ローマ人は多くの神々を作り出しましたが、真の

信仰はありませんでした。

聖書には当時のある出来事が記されています。カペナウムに駐屯していたローマ軍の兵士の一人が、中風で苦しんでいました。兵士の百人隊長は医者を連れてきましたが助けることができず、かねて噂に聞いていたイエス様を訪ねることにしました。

イエスがカペナウムにはいられると、ひとりの百人隊長がみもとに来て、懇願して、言った。「主よ、私のしもべが中風(ちゅうぶ)やみで、家に寝ていて、ひどく苦しんでおります。」イエスは彼に言われた。「行って、直してあげよう。」しかし、百人隊長は答えて言った。「主よ、あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは直りますから。と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私自身の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け。』と言えば行きますし、別の者に『来い。』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ。』と言えば、そのとおりにいたします。」

イエスは、これを聞いて驚かれ、ついて来た人たちにこう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことがありません。」

(マタイ　8・5〜10)

このローマ軍の百人隊長はどういうわけか、「まことの神がイエス様を人間のところに遣わした」ことを驚くほどに、それもイエス様が驚かれるほどに深く理解していたのです。どうかあなたも、イエス様について記されている数多くの記録をご自分で読んでみてください。まず聖書を手に入れ、ヨハネの福音書から始めて他の福音書を読んでみてください。あなたはきっとイエス様について素晴らしいことが記されているのに感動するはずです。

さて、この記事にあるイエス様は、中風の兵士の苦しみを直すためにだけこの世に来られたわけではありません。また、神の実在を証明するためだけでもありません。実は、もっとほかの事を望んでおられたのです。「人々が神との平和を得る」こと、そのためにこの世に来られたのです。

神と人との間は、目に見えない異次元の壁で隔てられているだけでなく、全く別の強固な壁も邪魔をしています。その壁とは、私たち自身の「罪」が作り上げる壁です。その壁は、たとえばあなたが嘘をつくたびごとに、一段ずつ高くなっていきます。またあなたが神を無視し、一日中祈らずに過ごすなら、それによっても壁がさらに高くなるのです。汚れ、姦淫、盗み、安息日を守らなかったこと、また多くの律法を守らなかったことなど、すべての罪が「神との隔ての壁」を高く積み上げていきます。ほかでもないこの私たち自身が、神と人間を隔てる壁を高くしているのです。

しかし、神は聖なるお方です。私たちが「神」と言うたびに、必ず私の罪、神への債務の問題も同時に浮上してきます。この問題はどうしても解決されなければなりません。神はすべての罪を非常に真剣に受け止められます。しかし人々は、次のようなことを言うのです。「私が神のことを信じているだけで、神は喜んでくださっている」と。注意してください。神を信じるというだけのことなら、悪魔でさえも神を信じているのです。悪魔は決して無神論者ではありません。悪魔は神が生きていることを身にしみて知っています。しかし、悪魔は、「神との平和」を持ちません。「神との平和」は、神と私たちとの間に立ちはだかる「罪と負い目の壁が取り除かれた時」に初めて実現します。そして、まさにそのために、イエス様はこの世に来てくださったのです。イエス様は私たちの罪、神に対する債務を取り除くために、自分から十字架にかかってくださったのです。主なる神の裁きの前に、誰かが人類の罪を代わって負わなければならない、ということをイエス様はよくご存知でした。その債務を人間が負うのか、それとも神のひとり子であるイエス様ご自身が代わって負うのか、そのどちらかしかあり得ないこともご存知でした。そのうえで、何の罪もない生ける神の御子イエス・キリストが、私たちが受けるべき罪の裁き、罪の負い目を背負ってくださり、本来なら私たち自身が受けるべき裁きをも引き受けてくださったのです。

ここで、十字架にかけられた主イエス様を想像してみてください。これこそ、私が何物にも増して心動かされる場面です。十字架にかけられたイエス様が、神と人との隔ての壁を壊してくださり、罪を赦し、罪から解放してくださったのです。

イエス様は、苦しみと悩みの中にある人々のためにこの世に来てくださいました。聖書には次のように書かれています。

主は、私たちのすべての咎を彼（イエス様）に負わせた。

（イザヤ　53・6）

十字架にかけられた方が、私たちのすべての罪を負ってくださいました。十字架にかけられた方が、うず高く積み上がった私たちの罪の壁石を取り除くという、誰にもできなかったことを、成し遂げてくださいました。どうか、ご自分で聖書のその箇所を読んでみてください。イエス様が十字架にかかってくださったお陰で、次のことが実現されたのです。

彼（イエス様）への懲（こ）らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。（イザヤ　53・5）

別の例で説明しましょう。私は、よくスイス人の友人達といろいろな所に出かけ、食事をしますが、食べた後には必ず請求書がきます。そして勿論、私たちの誰かがそれを支払います。同じように、私たちの神に対する罪と債務についても、誰かがそれを償うために支払わなければならないのです。ですからイエス様が、あなたに代わって罪の負い目を支払ってくださったのです。イエス様がおられなければ、あなた自身がすべての罪の負い目を神に支払わなければなりません。ですから、イエス様は私たちにとって実に大切な方なのです。私のためにすべての債務証書を無効にしてくださったのです。

そのイエス様は、十字架の上で死なれた後、ずっと死んだままの状態でおられるのではありません。聖書には次のように記されています。

十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに

差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように。」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスは、答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」

（ヨハネ　20・24～28）

「神と共に歩む人生」は、決して私たちの幻想や想像ではありません。神はそのような、あいまいな存在ではありません。神は恐らくどこかにおられるだろうが、それがどんな方かはわからない、というような不確実な方では絶対にありません。「神と共に歩む人生」は、神の御子が地上に来られて、私のために死んでよみがえってくださった、という事実の上に成り立っています。ですから私は、神について確実に知っていると断言できます。この章の冒頭で述べたように、私はまずこのことを第一の前提としてあなたに説明しておきたいと思いました。繰り返しますが、「神と共に歩む人生」は、決して幻想や想像ではありません。

続いて、第二の前提条件に移りたいと思います。

「神と共に歩む人生」は、どうすれば手に入るか

私はよく人から次のように言われます。「ブッシュさん。あなたは非常に幸せな方ですね。私には無いものをあなたは持っておられる」と。私は答えます。「何をおっしゃるのですか。あなたも同じイエス様を、ご自分のものとすることができるのですよ。イエス様は今もあなたのために生きて働いておられます」と。するとすぐ次の質問が返ってきます。「そうですか。では、あなたのような『神と共に歩む人生』を手に入れるためには、一体どうすればいいのですか」

聖書はこの質問に、二言で明快に答えています。

主イエスを信じなさい。

（使徒　16・31）

ぜひ、あなたにもこの信仰に入っていただきたい、と私は願っています。そのためにはまず、「信じる」とはどういうことか、を説明する必要があるかも知れません。多くの人々が、「信じる」ことについて間違った考え方をしています。たとえばある人が、時計を見て「今は七時二十分です」と言うとします。すると時計を持っていない人々は、「私は、今はおそらく七時二十分頃なのだ、ということは信じる」と言うでしょう。このように、多くの人々は「信じる」ということが、不確実なことを、留保をつけて信用する行為だ、と思い込んでいます。それでは、聖書で言われている「主イエスを信じなさい」というみことばを理解したとは言えないのです。

「信じる」とは何を意味するかを、ある体験談によってお伝えしたいと思います。ある時、私はノルウェーの首都オスロで講演していました。翌日はドイツのヴッパータールという町で大きな集会があり、そこでも話す予定があったので、私は飛行機で帰るつもりでした。ところがオスロ空港が霧で着陸不能となり、飛行機はスウェーデンの町に着陸することになってしまいました。

その町だけが唯一霧のない空港だったので、多くの飛行機が殺到しました。大勢の人でごった返す空港内で、私たちは何時になったら搭乗予定の便が飛べるようになるのか、見当もつきませんでした。ところがその時、「南方方面に向かう便が出発予定です」という放送がありました。その放送は「南方方面」としか言わなかったので、多くの人々は「目的地がはっきりしない便など心配だからその便に乗るのはやめよう」と言い、また別の人々は航空会社の混雑処理に不満を並べ立て、皆がいきり立っていました。ちょうどその時、一人のパイロットが非常に緊張した、真剣そのものの表情で私の目の前を通っていきました。私は彼の顔を見て、思わず隣の人に言いました。「彼は、責任感の塊のようだね。中途半端な気持ではいないようだ。あのパイロットなら任せることができるはずだ。よし、この便に乗ろう」と。こうして私たちはその飛行機に乗り込み、どこか南の空港に無事着陸するまで、このパイロットに自分たちの命を預けることになりました。やがて

旅客機はフランクフルト空港に着陸し、長い時間がかかりましたが、我が家に着くことができました。「信じる」とは、こういうことを言うのではないでしょうか。そうです。「信じる」とは、誰かに信頼して自分自身を預ける、ということなのです。従って、「神と共に歩む人生」はどのように得られるか、と言えば、それは「主イエス様を信じる」こと以外あり得ないのです。イエス様という飛行機に乗り込むことです。片足を地上に残したまま飛行機に乗ることはできません。飛行機に乗るにはパイロットを信じ切って全身をすっかり預け切ることが必要です。イエス様を信じることも、それと全く同じです。主イエス様を信じる人生、「神と共に歩む人生」とは、全ての冒険を冒してでもイエス様を信じ切り、信じ通すことを意味しているのです。「イエス様。私のいのちのすべてをどうぞ受け取ってください。私はそれを永遠にあなたに明け渡したいと思います」。これは、ある歌の歌詞です。

神の御子であるイエス様に人生のすべてを明け渡すことほど、確実な生き方はありません。イエス様のようにいのちを捨てて私たちを滅びから救い出してくださったような方は、この世には誰一人おりません。イエス様は、私をこよなく愛してくださったがゆえに、私のために死んでくださり、そして、あなたのために死んでくださいました。イエス様のように私たちを愛してくださる方は、他にはおられません。そして、イエス様は死者の中からよみがえられました。私たちは、よみがえられたこのお方に私たちの人生を明け渡すべきではないでしょうか。そして、私たちの人生をイエス様に明け渡した時から、私たちは「神から与えられた人生」に入り、新しい人生を送るのです。ドイツには次のような素晴らしい歌があります。

「十字架についてくださった王なる方に、
私は自分自身を明け渡します。
自分の人生すべてをあなたに捧げます。
私の心のすべてをあなたの御前に注ぎ出します。
あなたの十字架に従って私は生きたいのです」

あなたご自身もこのように言うことができるように願っています。あなたの人生を神に明け渡し、「神と共に歩む人生」に入りたいと望まれるなら、つまりイエス様を信頼して生きたいと思われるなら、そのことをはっきりと口に出して神に告げてください。イエス様は、いつもあなたのすぐ傍におられますから、その声を間違いなく聞いていてくださいます。どうか次のように言ってみてください。「主イエス様、私の人生をあなたに明け渡します」と。私は若い時、神無しに歩んでいましたが、主なる神に立ち返った時、私は次のように祈りました。「主イエス様、これからは私の人生をあなたに明け渡します。私がいい人間になることは約束できません。あなたご自身が新しい心をくださらなければ無理です。私の悪い性格すべてを、そのままあなたに差し出します。どうぞあなたが私を変えてください」と。

この時、私の両足は地上を離れて、イエス様という飛行機に乗り移りました。そして、私の人生の操縦権を、ご自身の血潮によって私を買い戻してくださった方にお任せしたのです。

「神と共に歩む人生」をさらに推し進めるためには、次の三つのことがどうしても必要となります。それらは「神のみことば、神への祈り、そして神を中心とする交わり」です。もし、あなたがイエス様のものとされたなら、あなたはイエス様のことをもっと聞きたくなるはずです。聖書を毎日十五分間、静まって読み続けてください。わからないことは取り敢えずそのままにしておいてください。読めば読むほど素晴らしいことがだんだんわかってきます。私は自分がこの素晴らしい救い主のものである、と気づくたびに喜びが湧き上がってくるのです。そして、そのことを他の人に伝えることが大きな喜びになります。

神のみことばの重要性に続いて、祈りも大切です。イエス様は、いつも耳を澄まして聞いておられます。美しい言葉で話しかける必要はありません。もし、あなたが主婦であれば、次のようなお祈りで十分です。「主イエス様、今日は嫌な日です。主人は機嫌が悪く、子どもたちも言うことを聞いてくれません。私は、洗濯物が山ほどあり、お金も不足しています。こんな滅茶苦茶な状態をあなたの前にさらけ出しますから、どうか私に喜びを与えてください。そして、助けてください。あなたに全面的に信頼できることを心から感謝いたします」

おわかりでしょうか。私たちは、心にあるすべてのことをイエス様にお話しすることができるのです。そして、次のようにお願いすることも許されています。「主イエス様、私があなたをもっと知ることができ、更にあなたのものとなれますように導いてください」と。

「神と共に歩む人生」に必要なものとして三つ目に挙げられるのは、他の信者との交わりです。イエス様のものになりたいと思っている人々に連なることです。最近、ある人が私に次のように言いました。「私は、神を信じたいのですがなかなか先に進むことができません」と。彼に対して、私は次のようにアドバイスしました。「あなたには他のキリスト者との交わりが必要だと思います」。すると彼は言いました。「でも、私はあの人たちのことが好きになれないのです」。そこで私は言いました。「そうですか。それなら仕方ありません。しかし、天国に行った時にはその人たちとずっと一緒なんだと思えば、今、地上に置かれているこの時から、それを学んでいくしかないのです。神様は、あなたの個人的な好みに合うようなキリスト者を特別に集めるようなことはなさいませんから」と。

私は、若い頃にフランクフルトのある銀行の頭取を知っていました。年配の方で、自分の若い時の経験をいろいろと私に話しくれました。彼が高校を卒業する時、彼の父親は「これだけのお金をお前にあげるから、ヨーロッパの主だった都市を旅して、よく見ておいで」と言ってくれたのです。十八歳の若者が父親にこんな風に言ってもらい、こんな贅沢をさせてもらえるなんて夢のような話です。そして頭取は言いました。「当時まだ若かった私は、大都市に行けばきっと簡単に多くの誘惑に負けてしまうと気づいていました。でも当時、私はイエス様のものとなりたいという思いが強かったので、旅に出る時はいつも聖書を持ち歩いていました。そして、毎日ホテルから出る前に、必ずイエス様の御声を聞き、イエス様に話しかけてから出かけるようにしていました。また私は、どこに行ってもキリスト者を探すことにしていました。それで私はリスボン、マドリード、ロンドン、その他の多くの都市でキリスト者と出会いました。一番難しかったのは、パリだったかもしれません。いろいろな所で人々に尋ねながらキリスト者を探したあげく、ようやく「聖書を読んでいる人」ということである靴屋さんを紹介してもらいました。その靴屋さんの店に入って行って私は、こう尋ねました。『あなたはイエス様をご存知ですか』。すると、その靴屋さんの目が喜びに輝いたのです。私は続けて言いました。『毎朝ここに来て、ご一緒にお祈りさせていただいてもよろしいですか』と」

このように、若い頃の頭取は真剣にキリスト者との交わりを求めました。彼は、主にある暖かい交わりこそが、イエス様に従う人々にとっていかに大切かをよく知っていたのです。

ここで私がはっきりさせておきたかったのは、「神と共に歩む人生が決して幻想ではない」ということです。イエス様が地上に来られて以来、「神と共に歩む人生」は、もはや幻想ではなくなりました。そして、このような人生をどうやって手に入れることができるのか、という質問に対しては「主イエス・キリストを信じなさい」というのがその答えです。さて、ここで章の冒頭に掲げた本来の質問に戻りたいと思います。

「神と共に歩む人生」から何が得られるか

それをお話すると、語るべきことが多過ぎて、いくら時間があっても足りないでしょう。私は、父が五十三歳で死を迎えた時の最期の言葉を忘れることができません。「ヴィルヘルム、私の知人や友人の皆に伝えておくれ。私の人生のすべて、その最期の瞬間をイエス様がどんなに祝福し、幸せにしてくださったかを」と言いました。普通なら、死にかけている人がこんなことを言わないと思うのですが、いかがでしょうか。あなたは死を目前にした時、自分がどのような心境にあると思われますか。

まだ若い頃、私がルール地方で牧師として働いていた時に聞いた美談を一つお伝えします。非常に大きな集会が開かれており、学識豊かな男性が二時間にわたって、神が存在しないということを証明する講演を行いました。その会場は満員で、タバコの煙がもうもうと立ち込めていました。講演が終わると全員が賛同の拍手をしました。「そうだ！神は存在しないのだ。私たちは自

由に勝手なことをしていいんだ！」。講演の後、主催者が「続いて討論に移ります。何か言いたいことがある方は手を挙げてください」と言いました。誰も学者が語ったことに反論する勇気がありません。反対意見を持った人もいたでしょうが、壇上に上がって大勢の人々を前にして反論する人はいませんでした。しかしその時後ろの席で、ある一人のおばあさんが声を上げました。講演会の主催者は彼女に言いました。「おばあさん、何か発言したいのですか。それなら、前の方に来てください」。そのおばあさんは勇気のある女性で、演壇に向かって歩いて行き、壇上で話し始めました。「今、講演者の方は二時間かかって神は存在しない、ということを話されました。私に五分だけ時間をください。私の信仰についてお話したいと思います。私の天の父である主が、私のために何をしてくださったかを皆さんにお伝えしたいと思います。私がまだ若かったころ、主人が鉱山で事故に会い、彼の遺体が家に運ばれてきました。その前で私は三人の子供たちと呆然と立ち尽くしました。その頃は社会保障などが何もなく、私たちはどうしたらいいのか、絶望するだけでした。しかしその時、神様が私を慰めてくださいました。人々は私を慰めることができませんでしたけど、生ける神様が私と共におられ、私を支え、力となり、慰めてくださったのです。私は主に向かって願いました。『これからはあなたご自身が私の子どもたちの父親になってください』と。事故の後は、夜になると、明日はどうして子どもたちを養っていけばいいのかと、途方にくれる日々でした。そこで、私はいつも救い主に次のように祈りました。『主よ。あなたは、私がどんなに惨めな状態にあるかご存知です。どうか私を助けてください』」と。

このように語りながら年老いた女性は講演者に向かって言いました。「神様が私を置き去りにするようなことは、ただの一度もありませんでした。それから沢山の暗闇を通りましたが、神様が私を見捨てることは一度もありませんでした。それどころか、神様は大きなことをしてくださいました。神様は、御子である主イエス様を遣わしてくださったのです。この方が私のために死んで、よみがえってくださいました。そのとうとい血潮によって、私のすべての罪を洗い流してくださったのです」。そして、彼女は続けて言いました。「私は年をとっています。やがて死ぬでしょう。しかし、主は私に永遠のいのちの確かな希望を与えてくださいました。今、ここで私が目を閉じて死ぬことになっても、私はイエス様のものですから、天国で目を開けることになります。これらのことすべてを、主が私のためにしてくださったのです。今話された講演者の方に、私はお尋ねいたします。あなたの不信仰は、あなたのために何をしてくれましたか」。その講演者は、立ち上がってこの老婦人の肩をたたき、言いました。「あなたのようなご老人から信仰を取り上げようとは誰も思ってはいません。老人のためには、信仰はとってもいいことだと思っていますよ」。しかし、その時、この老婦人は大きな声でこう言いました。「私は、あなたご自身に質問をしているのです。どうかそれについて答えてください。私は主が私のために何をしてくださったのかを、今お話ししました。次は、あなたが私に聞かせてください。あなたの不信仰が、あなたのために何をしてくれたのかを」。非常に賢い女性ですね。講演者は何も言えなくなりました。

今の時代、世界中で主の福音がさまざまな所から攻撃されていますが、あえて私は尋ねたいと思います。「あなたがたの不信仰から一体何を得ることができましたか。あなたの主張からは、心の平安を得たことや、幸せになった体験などは何一つうかがえないのですが」と。

「神と共に歩む人生」から何が得られるでしょうか。

私の経験を言わせてもらえるなら、私の人生はイエス様によって神との平和をいただいたので、生きることに耐えられたのだと思います。一生のうちには心が潰れそうになったことが限りなくありました。でも、イエス様を知っていたので、助けられ、慰められて今日に至っているのです。

たった今電話があり、この近くで事故が起き、二つの家族が深い悲しみの底に落とされてしまったことを知りました。車が二人の子どもたちを轢(ひ)いて逃げたのです。私たちはいつなんどき、思いがけない事件や悲劇に遭遇するかわからないのです。突然暗闇に投げ込まれ「誰か助けてください！」と大声で助けを求めるようなことになるかもしれません。そのような人生の一番辛い時にこそ、イエス様を知っている意味がはっきりと明らかになります。

私は新婚時代、妻に「子どもは息子が六人欲しいな。みんなに

トランペットを習わせて自分のバンドを作るんだ」などと話していました。たしかに子どもは六人与えられました。四人の娘と、二人の息子でした。その二人の息子たちは、今は天国にいます。神様が二人とも天の彼方に持って行かれたのです。私は息子たちのことを忘れることができません。私は長い間、若い青年たちを相手に牧師として働いてきました。一人目の息子の死を告げられた時、私は心臓にナイフが刺さったようなショックを受け、悲嘆の淵に投げ込まれました。周りの人々は皆、慰めの言葉をかけてくれましたが、私の耳には届かず、それらの慰めを感謝して受け取る余裕などありませんでした。

その夜、私は牧師として、百五十人の若者に神様のみことばを伝えなければならなかったのです。でも、私の心は不思議に燃え立っていました。私は部屋に閉じこもり、ひざまずいて祈りました。「主イエス様。あなたは生きておられます。どうかこの惨めな牧師を憐れんでください」。それから、新約聖書を開いて読みました。そこにはこうありました。イエス様が語られたお言葉です。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。（ヨハネ 14・27）

イエス様は約束されたことを必ず守るお方だ、と確信していたので、私は次のようにお願いしました。「主イエス様。あなたがなぜこのようなことをなさるのか、今、私にはわかりません。どうか私にあなたの平安を与えてください。私の心をあなたの平安で満たしてください」。そして、主は事実、そのようにしてくださいました。そのことを今ここで証しできるのは、何という幸いでしょうか。あなたご自身も、周りの人々が誰もあなたを慰めることができなくなるような時が来れば、必ずイエス様を必要となさることでしょう。誰からも助けてもらえなくなった時、十字架上であなたの代わりに血を流し、いのちを捨てて罪から買い戻し、救い出し、その後よみがえられたイエス様を、心の底から頼り、知り、信じるようになります。そして、主に向かって次のように言うようになります。「主よ。私にあなたの平安を与えてください」。主が与えてくださる平安は、心の中に力強い流れとなって注ぎ込まれるのです。

私たちの人生の中で最も辛い時にも、このことが同じように起きます。これは、死を目前にした時も同様です。あなたご自身が死を目前にしたその時も、人は誰もあなたを助けることができません。最愛の人の手も、いつかは離さなければならない瞬間がやってきます。その時、あなたは神の前に立たされるのです。あなたは全ての罪を背負ったままで、神の前に出たいと思われますか。そうではなく、今、主の力強い御手をつかむことができ、次のように知ることができたら何と素晴らしいことでしょう。「あなたは、ご自身のとうとい血によって私を贖ってくださり、全ての罪を赦してくださいました」。そのように言えるなら、祝福のうちに死を迎えることができます。「神と共に歩む人生」から得られるのは次のようなものです。神との平和、心の喜び、神に対する愛、そして、私の敵や嫌な人々さえも愛することができるようになる隣人愛、不幸の中にある慰め……。それらによって、日々、太陽はあなたの上に明るく照り輝くのです。永遠のいのちの希望、聖霊、罪の赦し、忍耐などなど、「神と共に歩む人生」から得られるものは、数え上げればきりがありません。

最後に私の大好きな歌をあげて終わりにします。

「救い主である神の子どもとされることは、
何と素晴らしいことでしょう。
私はイエス様のもの、イエス様は私のもの。
イエス様こそは私の救い主、主、誉れ。
私のすべては主のもの、と心から言えることは、
何と素晴らしいことでしょう」

このように、救い主のものとなることは本当に素晴らしいことです。あなたご自身がこの富、この幸せをご自分のものにされることを心から願っています。

（以上はブッシュ兄弟が一九六六年六月一九日にザスニッツに於いて行なった最後の講演です。ブッシュ兄弟はこの伝道奉仕からの帰路、翌二十日に天に召されました。）

神と共に歩む人生